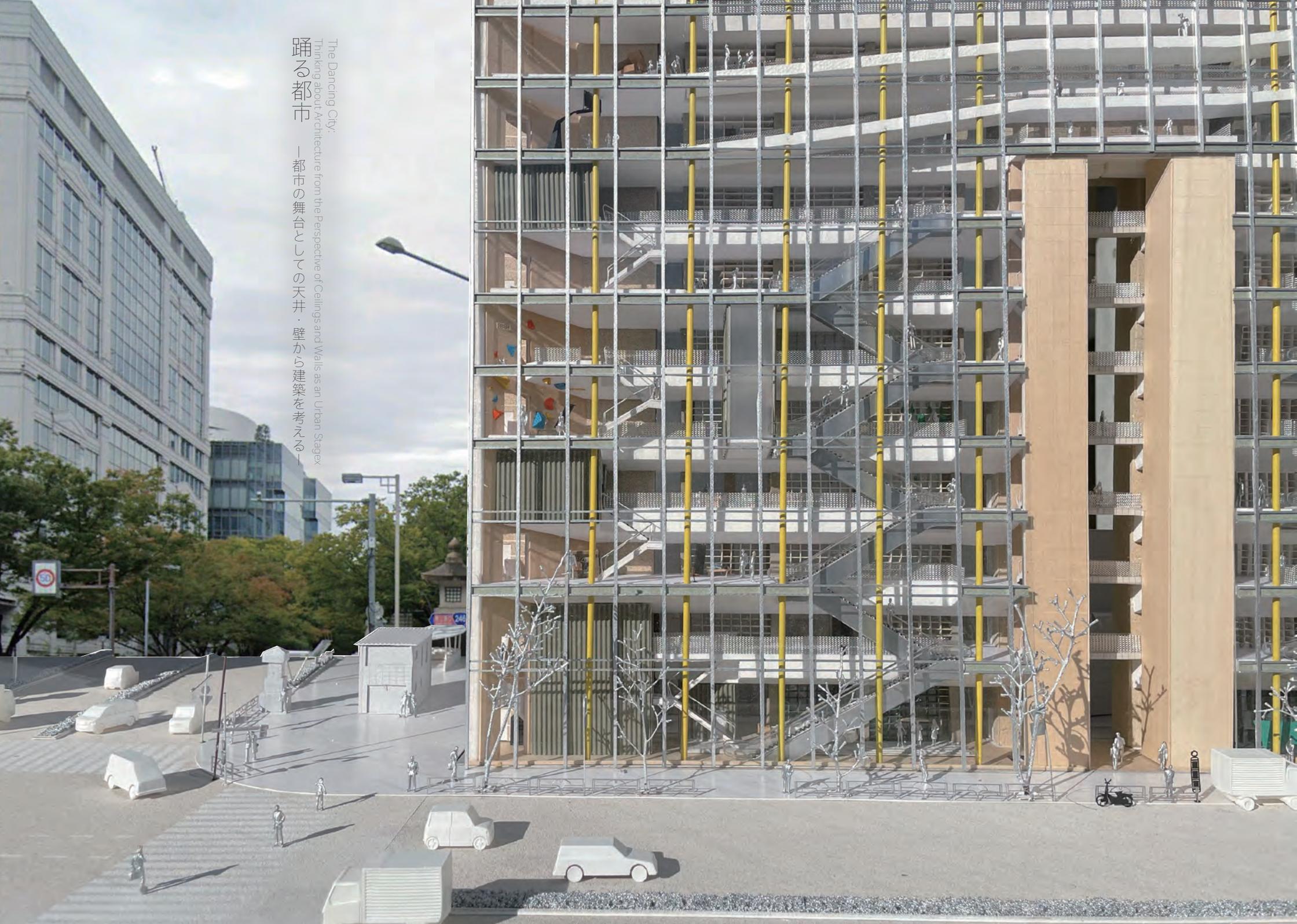
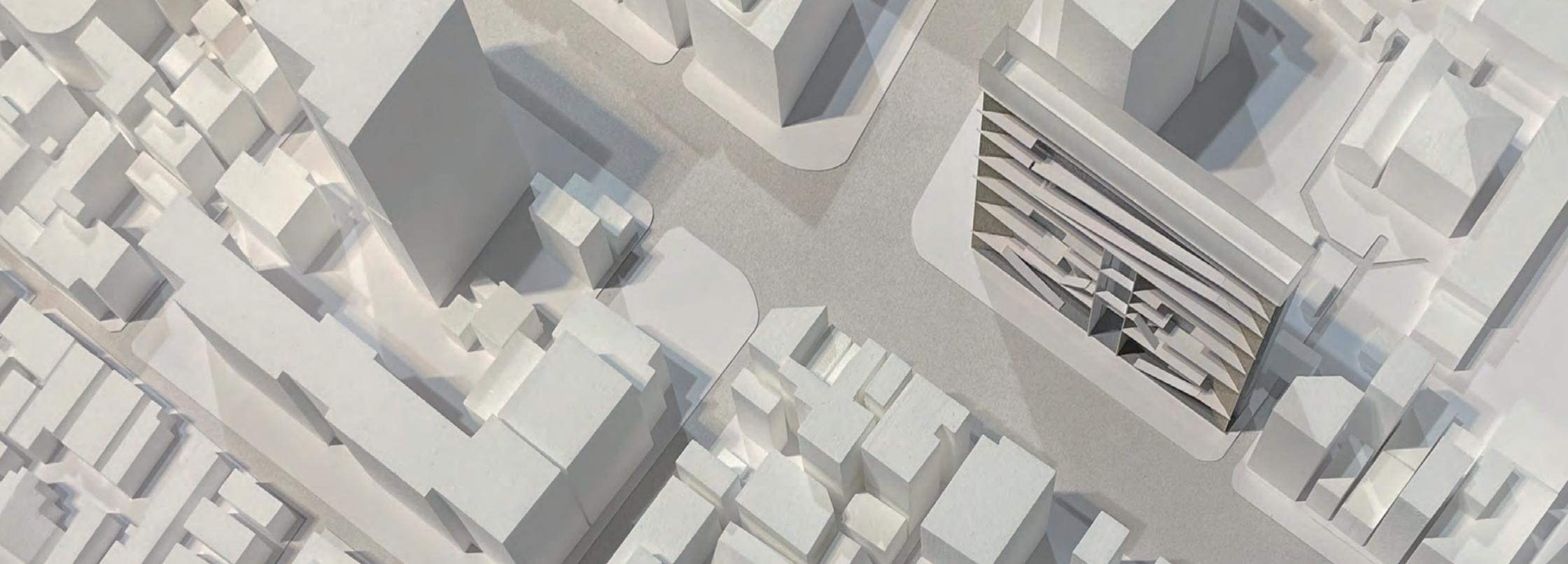


The Dancing City:  
Thinking about Architecture from the Perspective of Ceilings and Walls as an Urban Stage  
踊る都市  
—都市の舞台としての天井・壁から建築を考える—





# 1 はじめに

あなたは「黒い羊」という言葉を知っているだろうか。

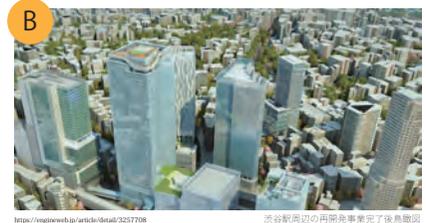
羊は基本的に群れの全羊が真っ白な体毛で覆われるが、ごく稀に黒い体毛を持つ個体が生まれる。

群形は同じでも色の違いに違和感を持たれた黒い羊に、白い羊は一匹として近づくことがなく群れから孤立してしまう。こういった現象を引用し、「身勝手によって要望や期待から逸脱していること」の比喩表現として用いる言葉が「黒い羊」である。(図2) こうした同質なものや異なるものの対立による問題を考えることは、分野を問わず現代における最も重要なイシューであることは間違いない。

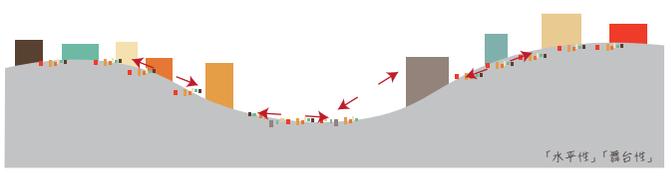
建築分野に目を向ける。資本主義国である日本において生活様式から建築、街並みに至るまで、その形態の形成は経済的仕組みによるところが大きい。日本では繰り返し行われてきた再開発により、都市は経済的合理性によって垂直な形を持った建築をワーテンウォールという同質性の高い、いわば「白い」スキンを覆った中高層ビルが群れをなしつつある。(図3)



黒い羊・白い羊  
<https://stockphoto.net/black-sheep-effect>



渋谷駅周辺の再開発事業完了後鳥瞰図  
<https://engineweb.jp/article/detail/3257708>



# 2

しかし都市とは本来、さまざまな人が集まり、建築内部で多様な活動が行われ、そこから地上や外部に出てきた人たちが、また別の場所ではパフォーマンスをしたり水平に移動する中で、別の人の活動である異なるもの(黒い羊)に出会うことができる。いわば誰もが演者で観客である「舞台性」に面白さがあると考える。(地上が舞台)

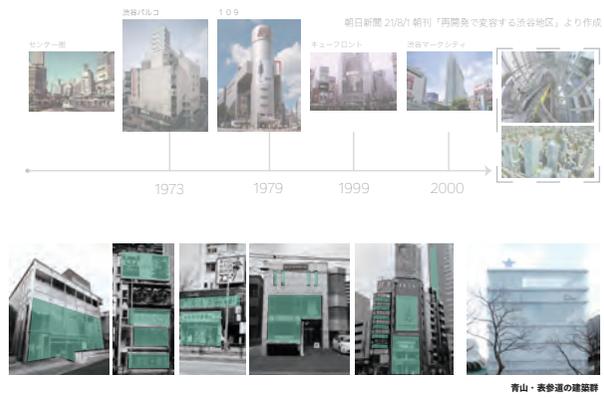
### 3 リサーチ・分析

では垂直で同質性の高い建築は都市に何をもたらしたのか。東京における複数の都市に目を向けてみる。

まず直近の渋谷や青山を例に見てみると、2009年に駅周辺が国の「都市再生緊急整備地域」に指定され渋谷ヒカリエ（2012年開業）、渋谷スクランブル交差点（2016年開業）などオフィス・商業施設・ホテルなども合わせた高層複合施設の群れ（白い羊）ができ、同時にそれに直接接続するための、パーバンコアができた。このため人々は、駅から地上に出て水平に移動せずとも直接目的の場所に到着できるようになった。そして、インターネットやスマホの検索機能もたらす、得られる情報の限定化が事業主体である複合商業施設資本による来訪者の選別を促すことにつながり（MITSUHASHI PARKING）、再開発建築には、同質性の高い人たちが（白い羊）が集まっている。

このように、便利になった反面、都市の活動を建築内部に完全に隠蔽することを都市の中高層ビルの群れはもたらしている。結果として、都市の建築は、水平方向のつながりも必要としない、物理的、視覚的、体験的に垂直で同質なものとなっているのではない。そしてそれは異質なものを排除することに繋がっているのではないだろうか。

地は、再開発が進んでいる街の一つである青山・表参道地域を見てもみる。その中で圧倒的にマイアンドン（ウインドウ）である。垂直化と内部の活動の同質化が進行した結果、内部空間の活動と外部の距離が遠ざかりファサードやウインドウを二に取り付く看板のデザインをメインに建築が作られていることに気づく。言い換えれば都市の舞台性の発露は人から企業の物となり、地上からその企業を象徴する、ファサードやウインドウにその場所を移行した、ということになる。



### 4 本設計の目的・敷地設定

そこで、経済性がもたらす建築のファサードを軸として、再び都市に生きる人々の手にも舞台性や水平性を取り戻すプログラム。空間操作も持つ「公共性」をほらんだファサードやウインドウを持つ建築を設計することで、今後の再開発における一つのプロトタイプとなるような複合商業施設を再構築することを本設計の目的とする。

敷地はリサーチの結果、垂直化と内部の活動の同質化が進行し、内部空間の活動と外部の距離が遠ざかりファサードを軸に建築が作られていることが顕著に見られる。表参道と青山通りの結節点である交差点に面する場所とした。また、この交差点周辺は東京メトロによる駅直結の商業ビル建築計画のため土地買収が進んでいる。よって、本建築の運営者は東京メトロを想定している。

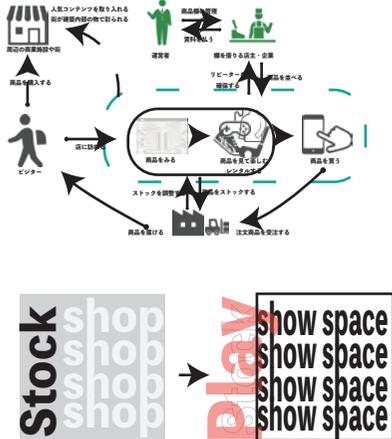


### 5 操作・プログラム

本設計におけるプログラムを「ショールーミング」とした。ショールーミングとは、商品も小売店を確認し、インターネットで購入する買物の仕方を指す。

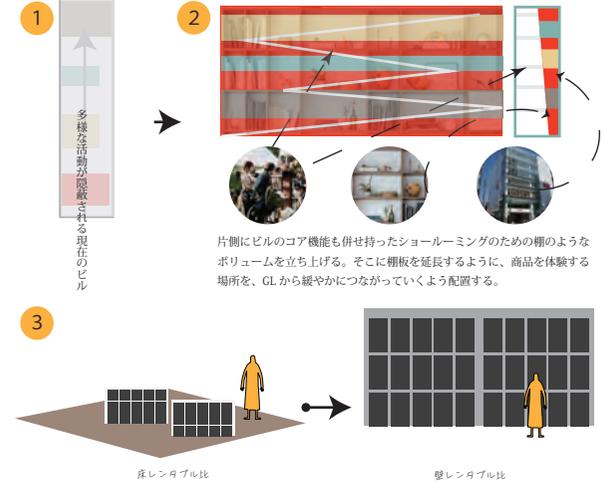
このショールーミングには、在庫を持つ必要がなくなるという利点がある。在庫分の余剰空間を活かし商品を見て楽しむためのショースペースを設計することができる。つまりショールーミングは、商業としての利益追求と、公共空間としての豊かさが共存する。また同時に、将来的にダイレクト・トゥー・コンシューマーのビジネスモデルが増え、既存の商空間に余剰が生じることが見通される中で、理想的な解答となるプログラムと言える。

このショールーミングスペースをメインとしコワーキングスペース、ホテル、カフェ等を複合したプログラムとする。



### 6 ダイアグラム

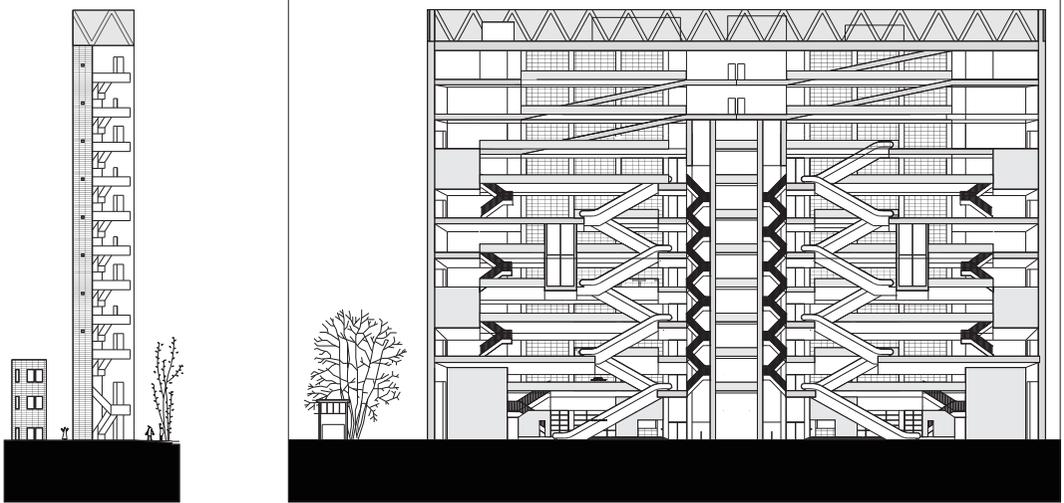
このショールーミングのための「舞台装置」とその前で行われる体験活動（舞台）がそのまま建築のファサードとなって外部へ表れるよう計画する。



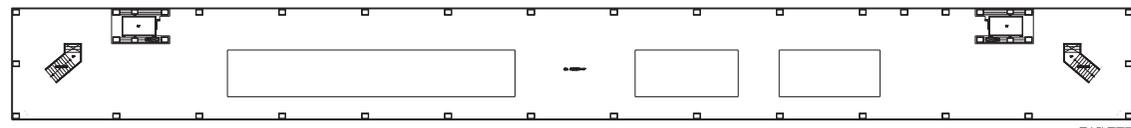
この建築は、展示される商品を扱うことに主眼を置くため、同じ商品は、一つ置いてあればいい。店舗価値を床から壁に変換し、床は公共性を帯びた新たな試みとして機能する



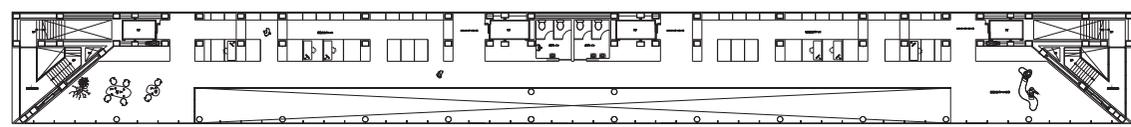
二面性を持ったファサードは表通りのファサードは商品や活動を具体的に、裏通りは商品や活動を半透明のガラスにより抽象化してより広域で都市の風景を変えようとする。南側から差し込む光が、商品や行為の色を反射させる。または影を落とし、抽象化した建物や行為がファサード全面に立ち現れる。例えば原宿駅のIKEA屋上から表参道方面を見た時、そのシーズンのものの色がぼんやりと壁面の色となって見えてくる。建築自体の構造と、商品棚、体験線の構成が組み合わさると共に、天井壁面の厚みも変化させることで、建築内部の舞台性がそのまま建築のファサードとなり、都市の風景を一変させる。



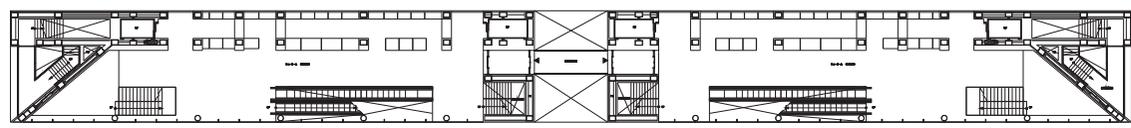
南側断面図



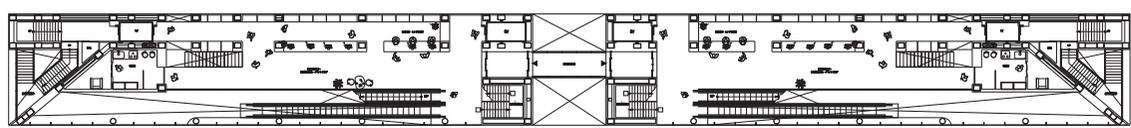
屋上階 平面図



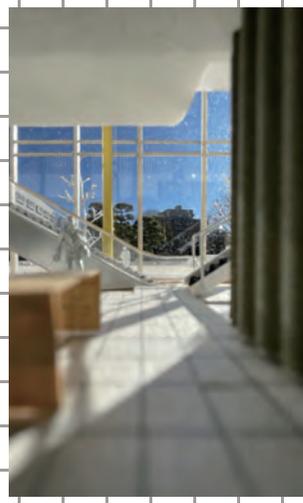
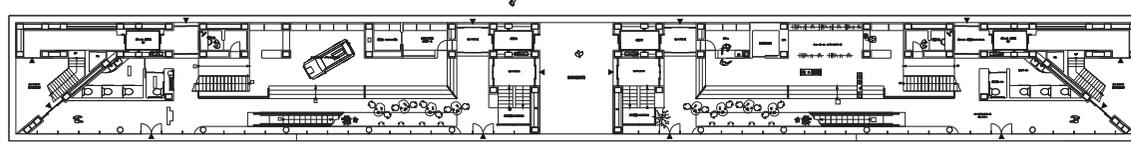
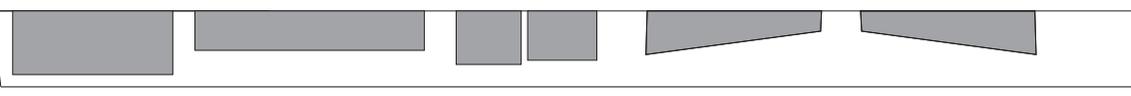
10F 平面図



4F 平面図



2F 平面図



都市には単に、多種多様な形態を容れられない複雑さがある。  
 渋谷からつながる歪な地形、大小の建築エレメント、目まぐるしいテナントの更替、表参道にみいた定数不定の建築、都市の活動をのものが、一瞬一瞬の空をまるで踊りながら踊るようにフワリと、ウィンドウで主張し都市風景を変えろ建築を提案する。